時を超える芸術

英語英文学科2年　山崎あい

アルフォンス・ミュシャ

皆さんはチェコを代表するグラフィックデザイナー、アルフォンス・ミュシャをご存知だろうか。彼は主に女性にスポットをあてたポスターやカレンダー、お菓子のパッケージなどをデザインするグラフィックデザイナーだ。彼を画家というべきかデザイナーと呼ぶべきかわからないが、ここではあえてデザイナーと呼ばせてもらおう。なぜなら彼の描く絵はメインとなる女性こそ美しく人を引き付ける力があるが、彼の作品の本当の主役というのは、その女性を引き立てる背景なのではないかと思う。たしかに彼の作品の人物（主に女性だが）は絵の中でも一番前に出てきているような描かれ方をしている。しかし、そこには必ずと言っていいほど花や星などの装飾品が人物と絡み合って存在している。そのため、はじめは人物を観ていたつもりでもいつのまにか背景やその装飾品に目がいっているということが多い。知らず知らずのうちに人の目を引き付ける力。それをもったものこそ、その作品の主役といえる存在なのではないだろうか。そして、その巧みな技を使うことのできたミュシャは画家というよりは、観て楽しませるデザイナーといえよう。

←アルフォンス・ミュシャ（1860–1939）

初体験

去る２０１０年５月22日～７月４日にかけて、東京都三鷹市の三鷹市美術ギャラリーにてミュシャの生誕１５０年記念の展示会が開かれた。私は迷うことなく学校の帰り一人でその展示会へと向かった。入場料は８００円。絵を見ながら解説がながれるというヘッドフォンの有料貸出があったのだが、急な決断だったので私は入場料の８００円（後々調べたら大学生は５００円だった）を払うのに精一杯だったが、皆さんが出かける際にはできればそのヘッドフォンを借りていただきたい。美術展というのは学校行事で回ったきりでましてや一人で来る機会などめったにないことだったので若干挙動不審な状態で受付をして会場に入った。入場してす

ぐ、初めて絵と対面した私はそのあまりの圧倒的な存在感におもわずため息が出た。本物を目の前にした張りつめた気持ち。すみの隅から自分の目に焼き付けようとする自分の必死さに驚いた。一番初めに私を出迎えてくれたその絵は『聖母』の絵だった。その展示会では一番古い絵だった。そのころのミュシャの絵は絵画だった。主に聖母が表面的に出ている絵。彼女を引き立てるものは彼女自身だった。それでも見事だと感じた。１５０年たった今も彼女はミュシャの絵の中で生きていた。その後も絵画らしい絵が続き、建物のデザインへと変化。そしてその展示会で私が一番気に入った作品に出会った。１８９６年ＪＯＢ社の巻き煙草用紙の下絵である。それまで見てきた絵とは明らかに違う色彩、真っ青な女性のデザイン。一目惚れだった、その絵の前にどれくらいいたのだろう。ただそれだけをじっと見ていた。何がそこまで私を魅了したのかはわからない。けれど、私はその絵を食い入るように見つめていた。泡の漂う水の中で女性が体をそらせた態勢でこちらをじっと見ている。煙草を巻く用紙でありながら、煙草を全く連想させないナンセンスな構図。それでいて実に上品で瑞々しく巻き煙草用紙にしておくのがもったいないくらいの美しさであった。ＪＯＢ社の煙草のリトグラフはもう一枚あり、それは中央に女性が横向きで座り、美味しそうに煙草をふかしているという、ポスターらしいものである。ちなみにリトグラフというのは、版画の一種で一般的に平版画（油と水の反発力を利用して油性のインクだけを紙に写し取る技法）こちらの方が割と有名なデザインなのだが、私の気に入った絵は、その巻き煙草用紙という次元を超えたデザイン性のある作品である。中盤に差し掛かるとそこには演劇のポスターや自転車のポスター、カレンダーのデザインが展示してあった。そこで私は一つ、ミュシャの絵に共通していることを見つけた。彼は、ポスターならばその役者の名前、どこかの会社の宣伝のものならそのメーカーの名前を人物の服や植物の葉などの絵で半分以上隠してしまうということである。そう、彼にすればその文字というものはデザインの一部に過ぎないものであるからして、そのデザインのバランスを崩すようならば容赦なく背景にしてしまうのである。しかし、前にも言ったように、このミュシャの絵の本当の主役は背景や装飾品という仮のメインである人物を引き立てるための存在であるから、その考えからすればこれはむしろ光栄なことであって決して失礼な扱いではないことがわかる。そして、ミュシャの最大の魅力は女性像である。こういうと今まで言ってきたことがまるで矛盾しているようだが、私はまさにこの女性像に惚れた。ミュシャの描く女性像（人物）は、いい意味でリアルさをあまり追求しないで描かれている。言ってしまえばまるで漫画のような。だからこそ感じるその作品の壮大さ、デザイン感の強さがまた良い。作品終盤にかかると聖書を絵にしたものや、女性像とは打って変わって男性が増えてくる。男性も女性にはない内なる強さを感じる。ミュシャの絵はただその一片をとらえたように観えても実はその先まで読んでいて、まるで小説で言うオープンエンディングのようである。だから観ていて飽きがこないし、観るたびにその絵への思いが変わる。そして、最後は絵本の挿絵で締めくくられていた。それは絵というよりは、下書きに近いものだった。展示されていた全１５０作品を見るのに所有した時間は約２時間。もう少し観ていたかったが、閉館も近づいていたのでもう一度あのＪＯＢの絵を観に戻り、その余韻に浸りつつ、会場を後にした。帰りに売店で売っていたポストカード（一枚１２０円）を５枚ほど購入した。しかしそこには私の好きなＪＯＢのポストカードはなかった。なのでもう一枚のＪＯＢ

を買って帰った。はじめは一人ということもあって少々緊張しながら入場したが、もう出る頃にはすっかり満ち足りた気持ちになっていた。よく美術の先生が「本物を見た方がいい」という意味がよくわかった気がする。それも好きな画家だったら特に。私はいつの間にか今まで知らなかった彼の魅力に気付かされる快感の虜になっていた。

←ＪＯＢ社の煙草（１８９６）

←ＪＯＢ社　巻き煙草用紙下絵（１８９６）

最後に

たとえその作品の作者が死んでも、その芸術が死ぬことは決してない。そしてその作者もその作品、小説でも絵画でもその中に生き続けることが出来る。作品のなかの作者の意志や思いが消えてしまったとき、その作品は初めて死ぬ。そうならない限り、芸術とはその作者の無限の財産であり、私たちの財産であるともいえるのである。

http://stephan.mods.jp/kabegami/kako/Job/picup1.html